

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372500670		
法人名	社会福祉法人 熊本菊寿会		
事業所名	グループホーム 大和		
所在地	熊本県熊本市北区植木町木留336-2		
自己評価作成日	平成30年2月25日	評価結果市町村受理日	平成30年4月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成30年3月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>熊本市北区植木町にあるグループホームです。私たちの施設では本人とご家族の希望があれば「看取り」を行っており、出来る限り入居者やご家族に寄り添いながら支援しています。</p> <p>また、入居者の平均介護度が上がっている状態でも、「臭い」がしない且外部からいらっしゃった方にお褒めいただいています。これからは食事を作る「匂い」や飾っている花の「匂い」などに包まれた、ゆっくりとした生活空間を作り上げていきたいと思っています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>開設時植樹された梅の木がこのホームの経年(17年)を語り、今年も入居者や行き交う人々の目を楽しませている。開設時からの安定した職員体制は家族との良好な関係や信頼関係を築き、家族・協力医療機関と全職員が連携しながらの最終章への取組にあり、これまでも多くの看取りケアの経験は特筆したい事項であり、管理者を中心として職員同士のコミュニケーションの良さや、家族との関係性が顕著に表れている。SDLの低下に伴い「ちょっとでも外に出よう」と庭先の花を愛で、常に入居者と職員が食堂を中心とした生活の中で、“ありがとう”の労いの言葉が行き交う生活に大家族としての温かいホーム形成であることが窺われる。地域との関係性作り、ホームから情報を発信したり、ホームへ足を向けてもらう方を全員で検討され、地域の中のホームとして梅の木同様に大きな花を開花させていただきたい。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	自分達で考えた介護の理念は、6項目ありケアの拠り所になっている。自分たちのケアがこれでいいのか不安になった時にいつでも振り返ることができるように2カ所に掲示している。	全職員で見直した理念をケアの根源として、掲示による意識付けと、年1回のマニュアル見直し時に理念も検討している。管理者を中心に定着した職員体制であり、現理念は職員の規範として浸透しているが、重度化傾向にあり新たに見直す必要もあるとしている。	今後も地域密着型事業所として、地域への啓発方法を全員で検討いただきたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩をしておられる方やスタッフが環境整備をしているときなど、近隣の方々との交流が増えてきている。気候が良い時には入居者と外に出かけ近隣住民と交流を、少しずつではあるが行っている。	地域住民からの野菜のおすそ分けや排水溝の清掃を行ってくださる地域の有志、散歩時の近隣住民との付き合い等徐々にではあるが地域との関係が出来かけている。町内会との関係は希薄であるとしている。	保育園との相互交流や、職員の人脈を生かしながら、地域との関係を築かれることが望まれる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の相談には個別で対応している。認知症サポーター講習などを行いながら地域に根差したグループホームをつくっていききたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居者の生活状況などの報告中心の会が続いている。参加者からの意見や要望をもっと出していただき、入居者のケアや地域に役立てるようにしたい。	2ヶ月毎に開催しているが、入居者と家族が中心であり、家族が参加しやすい日程としている。日常生活の報告や、家族の看取りに関する相談等に対応している。家族への可視化として会議方法を検討される事や家族からの意見等が出るような工夫に期待したい。また、行政や地域からの参加が望まれる。	行政や地域包括支援センター、社協、消防や民生委員へは参加を呼びかけられていり、参加が得られない状況にある。まずは地域包括支援センターへ参加を依頼される事とともに、入居者に関わる各関係機関への参加を依頼いただきたい。運営推進会議を通して地域への情報発信源、地域の情報リサーとの場、地域の中にあるホーム形成に運営推進会議を位置づけられるよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	困った時には相談や報告をしているが、なかなか密に連絡はとれていない。	集団指導や研修に参加したり、困難事例の相談、介護相談員の利用による意見交換会参加等はあるが、必要最低限の関わりである。地域包括支援センターに入居に関する相談等を行うこともある	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていないつもりだが、気付かないうちに行っている場合もあるのでミーティングの時やお互いが声を掛け合っていきたい。特に言葉での拘束には配慮が必要である。研修を行ったりして入居者の尊厳について考えていきたい。	身体拘束廃止宣言を行っているホームは、ベッド柵や職員の声かけ等も拘束の一つとして具体的に検討している。また、管理者は自分がされたらどうか等自分に置き換えて考えたケアにと努めるよう指導している。帰宅願望はあるが、ADL上で外までは出られることは無いが、玄関内ドアに鈴をつけている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と同じく気付かないうちに行っていないかスタッフがお互いにチェックしていきたい。特に「無視」などないように気を付け尊厳を守りたい。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	スタッフは年に一度は必ず勉強会を行っているが、運営会や家族会での勉強会を行えたらと考える。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には十分な説明を行っている。その際不安なところ等あれば個別で説明をいつでもする事を利用者や家族には伝えている。利用前の時点でも簡単に説明して納得されてからの入居を勧めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	「家族会」でご家族だけで話していただく時間を作って意見を出しやすくするようにしている。意見要望は、GHがより良くなれる有難いものだということを毎回お伝えしている。	家族との信頼関係が重要であるとして、何でも出してほしいと依頼してるが意見等は出されず、家族へはアンケートにより意見等を収集している。また、家族会の中で家族同士の話し合の場を設け、外部評価結果も郵送と家族会の中で説明している。	家族からの温かい言葉を全員が共有している。家族からの言葉の良し悪しに関わらず、記録として残し、職員のモチベーション向上に繋げられることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、普段からスタッフと一緒にいるので、話しやすいと考える。意見は否定することなくケアや運営に活かせるようにしている。	開設時から関わっている管理者は日々ケアに入りながら職員とのコミュニケーションを図り、意見や提案等を収集し、ケアに反映させている。開設時からほとんど変わらぬ職員体制に働きやすい環境があると推察できた。法人からも入居者の様子や職員の現状等の把握に訪問されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	ミーティング時などに休み時間や年休取得などスタッフが働きやすい環境になるように話し合いをしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	少なくとも月に1回は研修を行っている。また、事例検討などの行い方の指導を行い始めている。外部の研修に参加したら報告をもらう事で本人は振り返りが出来、全員で知識の共有が出来ている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は、他GHと交流し情報収集を行ったり、GH以外の事業所とも連携をとっている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者の表情に注目することによりその人の理解を深め、入居の不安や戸惑いを受け止めていくようにしている。特に入居当初は馴染みの関係を築くためにも寄り添うようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の来訪時、安心していただけるように入居者の状況をお伝えしながら、家族からの要望や困りごとを尋ねるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学時にもゆっくり話を聴き、家族の置かれている状況での困りごとを見極め、必要であれば他のサービスに繋げるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフと作った介護の理念の中には「共に」という言葉を使い、上下関係は勿論のこと、介護を「する側・される側」の考えを持たないようにしている。尊敬の念を持ち関わっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の気持ちは勿論のこと、家族の「気持ち」にも寄り添えるようにしていきたいと考えている。利用者と家族の関係性を踏まえて、一緒に支援していくようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者の馴染みの方が訪ねて来られた時はゆっくりと話ができるように環境を整えたり、出かけたという場合にも家族と調整しながら支援している。	入居者は外に出ることが難しく、家族の訪問や友人の訪問等を支援している。正月の我が家への帰省はあるが、これまで毎月家族と外泊されてきたい入居者も現在は難しくなってきた。家族による外出も緊張もあるとして、最近では家族との外出・外泊が難しい状況もあり、墓参等の希望等把握した事例は家族に代言している。	馴染みの場所への支援は困難の状況も見られ、生活歴等から新たな関係を見出されることが期待される。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で良い関係が築けているときは、スタッフは見守りを行うようにしている。利用者同士の馴染みの関係の重要性はスタッフ全員が理解しているのでこれからも尊重していきたい。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院等での退居や在宅復帰などの場合は、(迷惑でなければ)本人に会いに行ったりしている。移動が必要になった場合も次の事業所に対して情報を伝え暮らしが出来るだけ継続するように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	「その人」に注目して希望や意向の把握をしている。介護度が高く自分を表現できない方は家族に尋ねたり、スタッフで意見を出し合いながら検討している。	職員はゆっくり話をしながら、選択できるような言葉で投げかけ、スキンシップで会話を引き出している。意思疎通も難しい現状にあり、表情や仕草等により推察しながら、ケアに反映させたり、笑顔をバロメーターとして捉えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人からは勿論、家族や関わってきたケアマネからの聞き取りをして、これまでの暮らしやこれから望む暮らしを実現できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	「その人」を支えるチームとして状況や出来る事を発見し、共有するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーだけでなく、スタッフ全員でアセスメントを行い、計画を作成している。家族の意見も取り入れながら、また日々の状況の変化にも対応している。	個別生活特性シートにより、本人の表情や願い事等を把握し、毎月の定例会議の中で話し合いが行われている。心身の状況によっては頻回なアセスメントを行い、現状に即したプランを作成している。一日の生活リズムとケアポイントによりケア統一を図っている。	毎月定例会議の中で入居者個々に話し合いが行われており、今後モニタリングを行うことが望まれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録により情報の共有が出来る。記録を日々のケアに活かしたり計画の見直しに利用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームだからこそ即座にニーズの変化に対応できると考える。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の顔見知りの方を通して、グループホームの中だけではない楽しみのある暮らしを送ってもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科の協力医は毎週1回往診してもらっているが、状態によっては夜間や休日にも対応してもらっている。かかりつけ医の決定に関しては、本人や家族からの希望や要望を確認している。	かかりつけ医については本人・家族の希望に応じており、協力医による往診やももとのかかりつけ医での受診は家族が対応されている。口腔ケアについては、日頃の職員による食後の歯磨きや義歯管理と、歯科による往診、必要な義歯調整、口腔チェックが行われている。ホームでは看護・介護職員の垣根のない連携が、入居者の健康を支えており、重度化された方にも適切な対応が本人や家族の信頼に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	スタッフは看護介護の垣根なくケアをしている。その中で看護師には専門性を活かして状況変化にいち早く気付いたり、介護職に指導をしてもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくり	入院先でも出来るだけGHと同じような生活が送られるように、情報提供書を必ず渡している。また、出来るだけ面会に行くようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に大まかな看取りに関しての意見を伺っているが、状態が変わったりしたときにも看取りに関しては書面での確認を行っている。重度化や看取り期にはスタッフだけでなく、協力医療機関や家族が一つのチームとして支えていくように心がけている。	入居時にホームの看取り支援に関する方針を説明し、その時点での家族の意見を聞き、体調変化時にはその都度意向や方向性について話し合っている。また、運営推進会議の中で看取り支援を受けられた家族や検討されている家族との意見交換が行われている。ホームの看取り支援には、心強い協力医の存在があり、今年度も往診と訪問看護、家族の協力や職員の連携により看取りを支援している。家族の希望により最期の衣装に、大好きであった着物を職員が着付け、安らかに旅立たれている。家族より「大和で過ごすことができできて本当に良かった」という、感謝の言葉を受けている	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急処置を学ぶとともに、マニュアルを整備している。緊急連絡先や処方薬や既往歴など慌てなくて済むようになっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎日の避難経路の確認をするとともに消火器や懐中電灯等のチェック等も行っている。食料等の物品の整備を皆で検討しているところである。	今年度は5月に台風に向けた訓練と、火災訓練を2回、夜・昼を想定して実施している。台風訓練では、反省点に上がったカセットコンロの準備など準備している。備蓄は、法人での備えに加え、ホームでも必要な物を現在検討中である。火災はまず火を出さないよう、夜勤者を中心に安全チェックが行われている。	現在の安全チェックは、居室のコンセントの埃など、項目の見直しが必要と思われる。また、ホームの裏側など、避難・誘導などあらゆる面から妨げになるものはないかなどの点検や、片付けなどにも期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライドを傷つけないように言葉遣いや声のトーンや大きさなど留意している。排泄チェックなどスタッフ同士での申し送り時にも気を付けたい。	「共に笑顔のある楽しい暮らし」を理念に掲げ、入居者が自分でやりたいことを、安心して出来る環境に努めている。管理者は日頃から笑顔とスキンシップを大切にしたケアに努めるよう指導し、プライバシーや個人情報の使用については、研修会で周知を図っているが、排泄の状況連絡の際、つい大きな声を出してしまうことがあり、管理者は課題の一つとしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	なかなか言葉に出来ない方が多いので出来るだけ時間をかけて、気持ちを引き出すようにしている。スタッフは忙しさを表に出さないようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな一日の流れはあるが入居者の状況に合わせるようにしている。入居者が落ち着いた楽しい暮らしを送れるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その方の拘りを大切にしながら支援している。全介助の方も服を選ぶときには必ず確認をしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	メニューを決める時は、入居者と相談しながら決めていく。その会話の中から食材の皮むきなど一緒にしてより楽しみが増すようにしている。作業が出来ない方にも「味見」などしてもらっている。	入居者の食べたいものや得意だった料理などを発せられた時は、直ぐに献立に加える等楽しみとなるよう支援している。台所作業を好まれる方も少なくなり、味見など無理なくできることを一緒にやっている。中には、入居後ジャガイモの皮むきができるようになり、楽しみながら取り組まれる方もおられる。家族や近隣からの差し入れ野菜の活用、訪問販売のパンの提供、毎食にデザートか果物を添えるなど工夫された食事は好評であり、職員も同じものを一緒に摂ることで、思いを共有し会話も弾んでいる。	身体状況に応じた食形態の準備や、車いす利用者が食べやすいよう小テーブルの用意、座位の検討など、個々に応じた支援状況が確認された。今後エプロンについては、首に負担がないよう使用されることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養や水分摂取の大切さを学び、水分量の少ない方は、お茶だけでなく他の飲み物を勧めたりしながら出来るだけ飲んでいただけるように工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事後は一人一人に合わせたケアを行っている。口腔ケアの重要性をスタッフは理解している。また、毎週歯科往診に来ていただいているので、衛生士さんにその人に応じた口腔ケアを教わったりしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄のパターンを知りさげなく早めにトイレの声掛けを行うことで、失敗を防いで自信を持ってもらうようにしている。	入居者の殆どがリハビリパンツを使用されているが、中には布パンツにパットの併用で過ごされている方もおられる。オムツの使用でも歩行機能を維持してもらうために、可能な方には2名介助によりトイレでの排泄を支援している。トイレは2か所設けられ、居室の近くや慣れた場所へ自分で行かれる等職員が誘導している。安全面などから夜間のみポータブルトイレを勧めることもあるが、好まれない場合はおむつやパット交換、誘導など状況に応じて支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維の多い食品を摂ってもらったり、十分な水分補給やマッサージなどで出来る限り自然排便を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は毎日行っているので、体調や意向に沿いやすい。一人ずつの入浴なので羞恥心や恐怖心を払拭できている。一人のスタッフが最後まで関わるので、ゆっくりと入浴を楽しむことができる。	入浴は毎日や拒否をされる方へも誘導方法を工夫して週1~2回入ってもらうなど、個々の希望を大切にしながら支援している。また、冬場はヒーターで脱衣場を含め温め、拒否を少しでも和らげたり、シャワー浴の際は足浴を併用し湯冷めされないようにしている。菖蒲や柚子湯支援は毎年実施し、車いす利用の方には2名での対応しており、手すりの設置など安全面から検討されている。防災の面から、入浴後も湯を張ったままにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	表情やしぐさなどで疲れが見える時には、部屋で休むように声掛けしたりしている。夜に良く休んでいただくように、夕方からは特に穏やかな雰囲気を作るようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効果や副作用について勉強を行い、処方薬の変更があった場合には特に注意深く様子を見ている。間違いが無いように服薬時は声を出して確認するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一日の生活の中で、自分で出来る事はなるべく自分で行ってもらっている。計算や塗り絵などの遊びや調理の手伝いなどしてもらう事で、張りのある暮らしを送っていただけるように心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や買い物など気候や状況に応じて出かけている。重度化して外出が困難な方には、花壇の花を眺めてもらったりしている。	ホームの庭には職員の手入れにより季節の樹木や草花が咲き誇り、入居者の外出の機会を更に後押ししている。訪問当日も入居者と職員が花を眺めたり、会話をしながら散歩を楽しむ姿が見られ、日常の光景を知ることができた。昨春は弁当を持参し花見を予定していたが、雨のため室内で食事を楽しみ、後日個別でドライブがてら桜を見に出かけるなど、花見への思いを実現させている。	「ちょっとでもよいから外に出よう」を合言葉に、気候の良い時期には散歩や庭の花を見て楽しんでいる。今後は近隣にある法人保育園との相互交流や、家族の来訪時には庭先を散歩してもらうなど、家族への働きかけが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の中には、お金の話で不穩になる方もいらっしゃるので気を付けている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時に対応している。年賀状や暑中見舞い状などはこちらから出しませんかなど尋ねている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	出来るだけ家庭的な雰囲気を心掛けている。室温や明るさなども入居者の様子を見ながら気を配っている。	ホーム内には職員が持ち寄ったり、庭先に咲いた草花が洗面台やテーブルなど随所に飾られ、季節感を醸し、心和む空間である。カレンダーも動物など好まれる絵や写真のものが掲示されている。入居者のADLの低下から、ホールでの見守りも多くなっており、これらの環境整備は入居者同士や職員との会話にも繋がっている。団上がりの畳の間を活用する機会も殆どないが、腰を下ろしたり来訪者などがいつでも使用できるようにしている。	経年と共にともに掲示物や飾り物なども損傷や変色などが出てくることから、定期的な見直しが必要と思われる。また、検討されているドアの改修や畳替え等に期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや椅子などを配置し、くつろげるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	なるべく入居時には使い慣れたものを持ってきていただくようお願いしている。自分の家だと思ってもらえるような、居心地の良い生活空間を作り出せるように工夫している。	入居時に馴染みの使い慣れた物の持ち込みを依頼しているが、最近は家具などは少なく必要な衣類や小物類が殆どである。入居はベッドの向きや位置など状況に応じて検討している。衣類などは備わったクロゼットへの収納により、室内はスッキリとしており、歩行や車いすの方も安全に移動ができる空間である。衣替えは職員が中心に行っており、入居者の了解を得ながら進めている。	居室作りについては、持ち込みの少ない分、職員の工夫によって居心地や安心できる雰囲気などに努めていかれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の部屋の認識がしやすいように「表札」を付けたり、トイレには暖簾を付けている。		